

# ダルマキールティにおけるヨーガ者の智の定義について

著者	木村 俊彦
雑誌名	論集
巻	36
ページ	1-8
発行年	2009-12-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/00130290">http://hdl.handle.net/10097/00130290</a>

# ダルマキールティにおけるヨーガ者の智の定義について

木村俊彦

はじめに

私は仙台から京都に戻って、「ヨーガ者における直観と開悟」を弊父の勧めにより『禅文化研究所紀要』（山田無文老師喜寿記念号昭和五十二年、『禅学論攷』として同年出版）に掲載した。そこでは中村元博士が「シヤンカラにおける瞑想」、玉城博士が「原始経典の冥想試論」を寄稿されて発行の性格を強く意識しておられた。柳田聖山、古田紹欽などの先生方にまじって筆者もダルマキールティの名著『プラマーナ・ヴァールツティカ』知覚章のヨーガ論を報告したものであった。今はその淵源が『ニヤーヤビンドウ』にあること、それはヴィニタータデーヴァの解説によつて現観の体系に沿つたものであること、ヨーガ者の智を「前に説いた」(prag ukram)と言ふを諸註釈者が「第一章」(Pramāṣiddhi 章)であると見做すのは誤解であること、ヴィブーティチャンドラがディグナーガの『プラマーナサムツチャヤ』のヨーガ者の知覚の定義を示唆するのも間違ひであることなどの新知見を持つてゐる。そこでもう一度名著の定義を見るところから始めて、それらを開示する。テキストの原文は省いて、文献情報のみ末尾に纏める。

## 『プラマーナ・ヴァールツティカ』の「ヨーガ者の智」(yogijñanam)の定義

「前にヨーガ者の智を述べた。彼らのそれは修習から成り、分別の網を離れて明瞭に顕現するのである。」(Dv. III, 281)「愛欲・憂い・恐怖・錯乱・強盗・(悪)夢などで動揺した者達は、非実な対象をも現前に在る如くに見る。」(282)「分別にとり憑かれた者には明晰な対象の顕現が無い。夢にても伝えられるが、夢の所伝は実際の対象ではない。」(283)「不浄(観)

ダルマキールティにおけるヨーガ者の智の定義について

や(十)遍(処) (Kṛtsnani) などの非現実も瞑想 (bhāvanā) の力で創り出せば、「明瞭な顕現で無分別(知)」と言つ。」(284) 「だから真実も非実も極度に修習すれば、瞑想によつて起るから、それは明瞭な無分別知の結果になる。」(285) 「そのうち先に述べた真相(四聖諦)に対する正しい認識 (pramāṇam sanvādi) が、修定より起る知覚と認められ、余は錯乱したものである。」(286)

始めの「前に……述べた」とあるを諸註釈は「第一章」(Pramāṇasiddhi 章)としてゐるが、「ヨーガ者の智」という術語はない。既に見たように、『ダルマキールティ宗教哲学の研究』前半は仏陀の智、後半は四つの聖原理(苦・集・滅・道)を論じたものである。戸崎宏正『仏教認識論の研究(上巻)』(昭和五十四年)脚注一二は註釈を紹介するだけで、意義を確認していない。この術語が出てくるのは勿論『ニヤーヤビンドウ』知覚章の次の第十一經である。

「真実の対象の瞑想の究竟の辺際より生ずるヨーガ者の智とが(分別を離れた正しい知覚である)。」

『ニヤーヤビンドウ』がダルマキールティの最後の纏めというフラウフルナーの措定はここで解かなければならない。『プラマーナ・ヴィニシュチャヤ』では次のように述べてゐる。

「『恐怖などのように修習の力で顕現する知は顛倒なく無分別の知覚 (pratyakṣam) である。』(I, 28) 聞所成の知によつて惹き起された決択した対象を理智の心によつて思惟して起した修所成の知が生ずる時、それは恐怖等のように顕現して、まさしく無分別の対象を持つ知覚である。四聖諦を現観する如きはわれわれが既に『プラマーナ・ヴァールツティカ』で論じた (Pv. III, 286) 如くである。」

『プラマーナ・ヴィニシュチャヤ』は『プラマーナ・ヴァールツティカ』の引用が多く、その纏めである。ここでは恐怖等の不実の知を起す修習をも説いて、四聖諦の如き真実の対象を持つ瞑想と混同し易い文章である。右記の『プラマーナ・ヴァールツティカ』の六偈を指していると思われるべきである。

その註釈が四聖諦を対象にするヨーガ者の智としてゐることから戸崎氏も、四善根位の体系(煖・頂・忍・世第一法)を少し観察している。そしてヴィニターデーヴァの『ニヤーヤビンドウ釈』に、ヨーガ者の智を世第一法から生ずるものと脚

注に述べておられる。これはダルモータラの註解と大変異なる。彼は言う。「瞑想の究竟」(bhāvanāprakatṣhaṇ)とは瞑想対象を顕現する知が明瞭になる発端 (ārambha) である。(究竟の辺際) (paryantah) とは、明瞭化 (sphuṭābhāvam) が少しく不完全なこと。明瞭化が不完全な限りそれは究竟に向かつて進む。しかし完成すればそれはもはや究竟に向かうことはない。だから完成の状態より前の状態が(明瞭化する究竟の辺際)と呼ばれる。その辺際から生じて現前するものの如くに瞑想対象の一層明瞭な相を把握する智が(ヨーガ者の智)である。<sup>3)</sup>

これは「辺際」を「究竟」のベースとして捉え、「世第一法」という四善根位の終極と見ていない。而るに、ヴィニータデーヴァは(ヨーガ者の智)の定義を現観の体系から説いている。渡邊照宏訳(『インド古典研究』I、1970)もあるが、Pousinの蔵訳テキストから重訳する。「(真実)とは不顛倒の意味で、四聖諦のことである。それを修習するのが(真実の対象の修習)で、その究竟が(真実の対象の修習の究竟)である。即ち念処と煖と頂と忍の境地である。その辺際が(真実の対象の修習の究竟の辺際)であり、辺際とはつまり(世)第一法である。」<sup>4)</sup>ヴィニータデーヴァに依ると、「辺際」とは四善根の終極である世第一法であり、要するにダルマキールティは現観 (abhisamayab) の瞑想体系を念頭に置いて、ヨーガ者の智を定義していたのである。

尚、不浄観は骨鎖観などのように人間の不浄・腐敗する様を観想して離欲の助けとするものである。有部系の禅経が早くに中国に伝訳されてそれらはよく知られている。地遍処や水遍処は有部や『アビダルマコーシャ』にも言われるが、分別上座部では十遍処 (daśa kṛtsnāyatana) として現にヨーガの方法論になっており、<sup>5)</sup>ブツダゴーサの『ヴィスツディマツガ』に拠っている。これらをダルマキールティは、不実の対象を修習するものとして忌避した。不浄観については『修行道地經』や『達摩多羅禅經』の他、『阿毘達摩大毘婆沙論』卷四十、『雜阿毘曇心論』卷九などを参照されたい。

## 現観ヨーガ

「真実の対象」(bhūtarthah)とは四聖諦のことであるから、その修習 (bhāvanā) は仏教行道論の「分明なる覚悟」(荻原

ダルマキールティにおけるヨーガ者の智の定義について

雲来' clear understanding 〓 モニエル辞典)、四聖諦現觀のことになる。問題はダルモータラが「辺際」(paryanta)を、頂上に辿り着くベースキャンプのように解釈したことで、瑜伽行派の伝統を惹くヴィニータデーヴァが註釈しなければ、折角のダルマキールティの多くはないヨーガ論が埋没してしまう所であった。ダルモータラはカシュミール王統譜『ラージャタラングニ』で讀えられた。年代は八世紀後半から九世紀にかけてとフラウワナーに推定され、シュタインケルナーの研究で、ダルモータラはアルチャタとシユバグプタの弟子であることが判った。哲学的論理学的伝統をカシュミールに伝えたが、ヴィニータデーヴァは『中辺分別論疏』、『唯識二十論』、『唯識三十頌疏』、ダルマキールティの『他者存在の証明』に複註を加えた人で、瑜伽行派の伝統を知悉している。ダルマキールティの現觀ヨーガ論を知る為にはヴィニータデーヴァに依つて現觀ヨーガ論を繙かなければならない。

ダルマキールティが直接これを学んだのは『アビダルマコーシャ』の第六章 (Margapudgalanirdeḡah 〓 道人論)での現觀論においてであろう。「世俗の第一法に続いて無漏の法忍が欲界の苦に対して生ずる。ここにおいてそれから法智が、同様にして余の界の苦に対して類忍と類智が生ずる。他の三諦(集・滅・道)においても同様である。以上のこれら十六心が聖諦現觀であり、三種類在る。謂ゆる見・縁・所作である。それは(世)第一法と同一の地である。(智の因たる)忍と智は次第の如くに直接の解脱の道である。」(Ak. VI, 25b-28a)

これ以前の第十七偈でヴァスバンドウは、無常・苦・空・無我の觀法なる善聖諦の順解脱分を挙げた後、四善根位の順決択分を言う。(煖)なる善根、(頂)なる善根、(忍)なる善根、及び(世第一法)なる善根である。最初は迷惑の薪を焼く謂であるから(熱)と訳すべきである。ここでは四聖諦を觀察して苦等の十六相を修習するとされる。下・中・上品と上つて頂きに至るに例えて言う。同様にして成満して決択する故に(忍)と言う。かくしてヨーガ者は成満して世第一法に達するのである。世第一法に至るまで (yavad agradharmā) を加行道として説いたとして、如上の偈に入る (p. 346)。見道と修道としては第十五刹那までが見道で、第十六刹那に道類智 (mārga 'nayañānam) に達すると言う。このように見ると『ニヤーヤビンドウ』の言う「究極」(prakarashaparyanta) は四善根位の最終段階とこう意味であることが理解される。この加

行道に在る者が「ヨーガ者」(yogi)である。「現観」の語は「涅槃を指向する正覚」(nirvāṇābhimukhaḥ saṃyaktbodhaḥ / p.328, 12)と同じ意味だとヴァスバンドゥは言うが、勿論「正等覚」(saṃyaksambodhiḥ)という仏智とは区別しなければならない。相応パーリ(ヒルマータイ版<sup>7)</sup>)に始めて出てくる「現観相応」で、正見を具足する聖弟子で現観に達せる人(āhisaṃetāvī)は法の眼(dharmacakkhu)つまり法現観(dharmābhisamayo)を得たと評される。更にマイトレーヤには「思現観」、「信現観」、「戒現観」などと命名される。勿論ヴァスバンドゥ以前にこのようにマイトレーヤが有部の伝統を發展させて、現観の体系から般若經を科段した『現観莊嚴論』を著わした。この中で「究竟」(prakāśhaḥ)の語は、最後の流通分の偈に出てゐる。

lakṣhaṇaṃ taprayogas tapprakāśhas tadānukramaḥ / tannisīḥṭṭā tadvipākag cey anyāḥ sōdharthasāṅgrahaḥ // viśhayaś tritayo hetuḥ  
prayogas caturātmakah / dharmakāyaphalaṃ karma anyas tvedharthasāṅgrahaḥ //

渡邊照宏「調伏天造正理一滴論釈和訳」の脚注十四に、ハリバドラが『Āloka』で、「一切相現等覚を得た者には今や終極(prakāśhaparyantaḥ)の証得ある故に、頂現観(umūḍhābhisamayaḥ)を説くべし」と述べている(Wogihara, p.763)と言うが、磯田熙文先生は四種順決択分とは無関係とされた。ヴィニータデーヴァはダルマキールティの「他者の存在の証明」にも註解を加えており、瑜伽行唯識派の伝統からダルマキールティを解釈する人である。かくてダルマキールティの言う「究極の辺際」は順決択分の終極である世第一法であり、そこから生まれるヨーガ者の智は見道から修道へ続くものである。

## 余 論

先に見たようにダルマキールティが「前に説いたヨーガ者の智」と言うをマノーラタナンディンは第一章(宗教章)を指すとしているが、これを書写したヴィブーティチャンドラは、ディグナーガの著『プラマーナサムツチャヤ』I.6「ヨーガ者どもの知覚は師の教説と交わらざる、対象のみを觀照するものだ」と言う箇処の自註、「ヨーガ者どもの知覚も聖典の分別と交わらない、対象のみを觀照するものである」をここで引用している<sup>11</sup>。しかしこれは明らかに(四聖諦現観)の内容

ダルマキールティにおけるヨーガ者の智の定義について

と矛盾している。後者は「師の教示の修習」だからである。尚、修習 (bhavana) とは「成る」(「bhu」の名詞「存在」(bhavah) の使役形で、瞑想によつて自己をその内容に成らせる謂である。ティゲナーガの定義は直観を強調したものであるが、ダルマキールティは自証知やアポーハ的判断知 (正しい言語表現) と共に四聖諦現観の修道を知覚 (pratyaksham) に含めて、認識論と宗教論を豊かに発展せしめた。木村『ダルマキールティにおける哲学と宗教』(平成十年、大東出版社)を参照されたい。

## 文献一覧

- (1) Pramānavārtikam, edited by R. Sāṅkītyāyana (The Journal of the Bihar and Orissa Research Society, Vol.24, Pt.1-2, Patna 1938).東北大学図書館所蔵の雑誌を磯田先生から拝借したものである。
  - (2) 蔵訳は T. Vetter, Dharmakīrti's Pramānavivṛṅgavyāh, I Kāpīel, Paryaksham Wien 1966, p.72 ; 74 に依る。
  - (3) 木村訳は『ダルマキールティ宗教哲学の研究』(昭和六十二年)所収の三三三頁参照。
  - (4) L.de la Vallée Poussin, Tibetan Translation of the Nyāyahindu of Dharmakīrti with the Commentary of Vinīadeva, Calcutta 1907, p.47. 東北大所蔵本。
  - (5) 藤吉慈海「ラオスの僧院——その瞑想法を中心として——」(『禅文化研究所紀要』一、昭和四十四年)、同師「タイービルマにおける瞑想法」(『印佛研究』14-2)も参照。
  - (6) Abhidharmakogabhāṣya of Vasubandhu, ed. by P. Pradhan, Patna 1967, pp.349-351.
  - (7) Mahāsaṅgīti Tīpīka Buddhavasse 2500, Vol.12 et 14 (Bangkok B.E.2551 ; C.E.2008)。タイ王室からわれわれが寄贈を受けたパリー聖典で、フッタジャヤンティの年にビルマで編集され、それを基にしたコンピュータ処理で先般バンコクから出版された。
  - (8) Abhisamayālaṅkāra nāma Prajñāpāramitopadeśaśāstra, ed. by F. I. Stcherbaskoi and E. Obermiller, Leningrad 1929, p.38.
  - (9) (8) の偈の解釈を磯田先生に教わったので付記する。「一切相等の三智の特相、その実修(一切相現等覚)、その最勝観とは別の六種の現観の撰義である。三智の対象、その作因たる四種の実修、果報たる二十七事業を伴なえる法身とが、八現観とは更に別の三種の撰義である。」(Cf. Wogihara, Abhisamayālaṅkāraloka, p.992)
- 本稿の趣旨から、『ニヤーヤビントゥウ』は主著より先に造られたことになり、フラウフルナー博士の言う「最後の總め」と

- る観点 (Die Entstehung und Entwicklung der Werke Dharmakīrtis, 1953) は否定された。なお同博士 Abhidharmastudien, III. Der Abhisamayavādhā (Wiener Zeitschrift für die Kunde Südasiens, Bd. 15, 1971) を参照された。
- (10) 蔵訳は Bibliotheca Buddhica 19 (1916) にて F.I. Stecheraskoi が出版。北川秀則「他我存在の一証明——Santānāntarasiddhi の紹介——」(『文化』第十八卷三号、昭和二十九年) 参照。
- (11) Pannāvarīkāvṛti of Manoranandin with the Notes of Vihūcandra, edited by R. Saikryāyana (The Journal of the Bihar and Orissa Research Society, Vols. 24 : 25 ; 26, Panna 1938-1940), p. 203, n. 1. Pramaṇasamuccayaika の蔵訳は東北大学図書館蔵、デルゲ版 No. 4204 (マイクロフイルム本) の 15b, 7. j. のコピーに基づいて東北大学付属図書館の職員のお世話になった。

付記

ステイラマティはヴァスバンドウの『唯識論三十頌』の第二十五偈の最後の句を引いて「それが唯識性なりということは、現観が説かれている」と注記した。見るものと見られるものの不二一体は、対象は名のみにて唯心に穩坐することになり、前者が引用する出典不明の「名において穩坐する」(nāmi uśhan) 云々は、野沢静証氏が指摘するように意味の上からは『大乘莊嚴經論』第六章の前半五偈が述べている。そしてヴァスバンドウがそれを、現観の体系と結び付けて解説していることが重要である。ヨーガによる唯心性の悟入は、対象を名のみ (jāpanāṭha) と観ずることから始まるが、現観の体系からは、聞と思から成る順解脱分から入り、順決択分の一、煖位、二、頂位、三、忍位、と菩薩の加行道は昇り、四、世第一法で唯心さえも空であると見性するのが法界の現証であるとする。謂わゆる所依の転換は修道位における究竟道で、事実上の仏智である。ダルマキールティが「ヨーガ者の智」と言ったのは四のことであり、「修所成の智」になっている。

ダルマキールティにおけるヨーガ者の智の定義について



# DHARMAKĪRTI ON MEDITATION

Toshihiko KIMURA

木村  
俊彦

Dharmakīrti (c. 550–620) related a general definition of the intellect of meditator in the chapter of intuition (pratyakṣam) of his magnum opus, the *Pramāṇavārttika*. His statement as for it is as follows :

“Formerly we have defined the intellect of yogins (yoginām jñānam). Their intellects consist of meditation (bhāvanāmayam) and appear clearly departing from the secular judgments. (281)

Men who fluctuate being caused by love, sorrow, fear, madness, robber, dream and so on see unreal objects as existing in front of him really. (282)

Men who are bound by secular judgments (vikalpaḥ) cannot see real things. Dreams present figures, but they are not real things. (283)

Meditated unreal corrupt body, full of earth (pṛthivī) and so on are called clear appearances and free from judgment if they occur by the power of meditation. (284)

Therefore, in case men meditate vigorously real and unreal things as outcomes of intuition, it is an outcome of intellect of non-judgment (akalpadhīphalam). (285)

In them the right cognition which we stated formerly as having real objects is the intuition from meditation and the other cognitions are confused.” (286)

These statements present the same meaning as that of *kārikā* 281. The intuition means non-judgment and the object is divided into real and unreal one. What occurs from meditation is divided also into real and unreal. Dharmakīrti doesn't acknowledge yoga methods of *sthāviravādins*, e.g. meditations of corrupt body, full of clay and so on. He presupposes the *abhisamaya* meditation which is a tradition of the *viññāna* school.

The statement that formerly we have defined the intellect of yogins doesn't mean the *Pramāṇasiddhi* chapter supposed by all the commentators, but presupposes the *Nyāyabindu*, I, 11 as runs :

“The fourth intuition is the intellect of yogins produced from culminational (prakarshaparyantaja-) meditation on a true object.” Vinītadeva made this annotation relative to clear understanding (abhisamayaḥ). Dharmottara constructed the word 'prakarshaparyantaja-' as from a base camp for a summit of mountain. He was a logician but not a scholar of the *viññāna* school. 'True object' means the four noble truths (catvāry āryasatyāni). These principles are argued adequately in the latter half of the *Pramāṇasiddhi* chapter. The *abhisamaya* yoga is stated in the sixth chapter of the *Abhidharmakośa* by Vasubandhu. Vinītadeva annotated the culminational meditation as the *laukikāgradharma*. The *abhisamaya* meditation on the four noble truths or their sixteen phases are divided into heat (uṣṇaḥ), summit, stoutness (kṣhāntiḥ) and top stage (agradaḥ). *Sthiramati* also annotated the state of 'consciousness only' by the stages of *abhisamaya* meditation on the *Mahāyānasūtralānkāra* of *Maitreya*.